

サンプル 翻訳原稿の一部です。

『艦砲射撃の中、家族で防空壕に避難し、終戦後は孤児院で生活』

〇〇〇〇 () 77歳

(出身地：沖縄県浦添市宮城)

戦争が始まると、父は防衛隊に召集されたので、祖父と姉、妹と私の4人で逃げました。

4月1日に米軍が上陸すると、どんどん、私たちの集落に米軍が迫ってきました。はっきりと記憶に残っているのは、私たちの家が焼けた時のことです。あの頃はほとんどの家が茅葺きで、そこに焼夷弾を落とされたらひとたまりも無く、すごい勢いで家々が燃えていました。

家を焼かれたため、防空壕へ避難しました。2、3家族が一緒になって防空壕に入ったのですが、だんだん戦況が激しくなって、とうとう艦砲射撃が始まりました。あちこちの防空壕が艦砲射撃でやられてしまっ、私たちも、もうここにはいられないということで防空壕を出ました。

今のキャンプ・キンザー（浦添市）の中に集落のガマがあったのですが、防空壕を出た私たちは、そのガマに移動しました。その移動の途中で銃声がして、側にいた祖父が倒れました。

その後、姉が妹の手を引き、避難しました。そこには、婦女子のみでおおよそ7、8人が隠れていました。しばらくするとそこに米軍が攻めてきて、「デテコイ、デテコイ」と呼びかけが始まり、4、5名くらいの米兵がガマに入ってくるのが見えました。「出ちゃだめだよ！出てはいけない！」と誰かが言って「これを投げなさい！」とって手榴弾を指さしました。しかし、使い方もわからないため投げずにいたら、誰かが投げるそぶりをしました。これを見てあきらめてしまったのか、米兵は出て行ってしまいました。

するとまもなく、ガマの中に黄燐弾が投げ込まれました。火の玉がパッとあたり一面に散らばって人びとは「逃げろ！殺される！」とってパニックになりました。私と姉は自分のことで精一杯で、妹を置きざりにしてガマから逃

げ出してしまいました。逃げながら視線の中に見えた妹は、ジッとこちらを見ていましたが、どうすることもできませんでした。